時間〈トキ〉を越え

M3

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
時間〈トキ〉を越え

【Ｎコード】
Ｎ８６３９Ｙ

【作者名】
Ｍ３

【あらすじ】
初代ボンゴレと十代ボンゴレ……ボンゴレリング“縦の時空軸の奇跡”が再び！！！

序章（前書き）

初めて、初代ボンゴレを書いてみます（ーＡー；）
ご感想・ご意見頂ければ笑

あえて設定をいうならば、原作＋アニメ＝至門編といったところです。なのでボンゴレＶＧはないです！・初代と十代達は顔見知りです！

小説『ボンゴレ?世の決意』の完全続編でよろしいかと……

では、お楽しみ下さいませ♪（、∇´ゞ

序章

―並盛町、この地を陰となり陽となり支えている組織がある。

“ボンゴレファミリー”

このボンゴレファミリーボスを務めているのが、沢田綱吉。通称ツナ。優柔不断で小心者の彼は、中学時代こそ“ダメツナ”という愛称で冴えない日々を歩んでいた。

しかし、そんな彼に1人の世界最強のヒットマン（殺し屋）が現れる。

―呪われし赤ん坊、アルコバレーノのリボーン

彼は、いきなり家庭教師として現れるや否や、沢田綱吉に“ボンゴレ次期１０代目候補”なのだと語り、彼を立派なマフィアのボスとするため、特訓の日々を強いた……

そして沢田綱吉には…ボンゴレとしての、大きな戦いの日々が待ち構えた……

マフィア反逆者六道骸率いる黒曜中との戦い

ボンゴレ独立特別暗殺部隊”ＶＡＲＩＡ“とのボンゴレリング争奪戦

１０年後の未来の世界、並盛とボンゴレの未来をかけた死闘、ミルフィオーレとの戦い

あれから、短くも長い月日がながれた……現在の沢田綱吉は、マフィア最強・ボンゴレファミリーのボス『ボンゴレ?世』だ。代々受け継がれしボンゴレリングと、“未来の戦い”で出会った大切な戦友であり、戦力のアニマルリング。今の沢田綱吉率いるボンゴレファミリーは、この2つのリングを守護し、時に糧として、自分達の町を守っている。

忘れてならないのが、沢田綱吉と共に数々の試練を乗り越えてきたボンゴレリングの守護者達だ。守護者は、ボンゴレリングを有する6人の幹部を指す。必ずしもボンゴレファミリーに所属していなければならないという縛りはないが、ファミリーに危機が訪れた時には必ず6人の守護者が集められ、どんな困難でも乗り越えると言われている。
ボスの沢田綱吉の持つ大空を筆頭に、嵐・雨・雲・晴・雷・霧と天候になぞらえた7つのリングがあり、掟に基づいて代々ボンゴレファミリーボスとその守護者6人が所持してきた。

嵐の守護者—獄寺隼人。荒々しく吹き荒れる疾風、常に攻撃の核となり、休むことのない怒濤の嵐となるのが使命だ。彼は沢田綱吉の

右腕として恐れられている。

雨の守護者―山本武。
全てを洗い流す恵みの村雨、戦いを清算し、流れた血を洗い流す鎮魂歌の雨となることが彼の使命。ボンゴレ2大剣豪の1人と謳われている。

雲の守護者―雲雀恭弥。何ものにもとらわれることなく、独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲となること。これが彼の使命だ。雲雀はボンゴレ最強の守護者とも言われている。

晴の守護者―笹川了平。使命は、ファミリーを襲う逆境を自らの肉体で砕き、明るく照らす日輪となること。綱吉や獄寺・山本より1つ先輩だ。

雷の守護者―ランボ。
激しい一撃を秘めた雷電、雷電となるだけでなく、ファミリーへのダメージを一手に引き受け、消し去る避雷針となることが使命である。ランボは幼い子供だが、その実力は小さな身体に秘められまだ

まだそこ計り知れない…

霧の守護者―六道骸。
無いものを在るものとし、在るものを無いものとすることで敵を惑わし、ファミリーの実態をつかませない…まやかしの幻影となることを使命とする。かつては対立関係にあった骸。だが、“大空”は、すべてを包み込む存在でなくてはならない。沢田綱吉には…その度量があり、そんな沢田綱吉だからこそ、六道骸も、実態の掴めない幻影としていられる。

これが、ボンゴレ?世率いるボンゴレファミリーである。まだ若いが、その実力はボンゴレ創設者達、初代ボンゴレファミリーとひけとらないだろう。その十代ボンゴレファミリーの姿に、マフィア界では

“初代ボンゴレファミリーの再来”

と謳われ始めている……

序章（後書き）

気がつけば…銀魂と青の祓魔師の同時進行になった！！（。□。；）

やべえ！投稿やべー……

九代目より

海はその広がりに限りをしらず

貝は代を重ねその姿受け継ぎ

虹は時折現れはかなく消える

リングに刻まれし我らの時間

ここに　いま

……

「……ん……」

「おい。ツナ」

「……プリー……モ…」

「起きろツナ！」

「っ？！……いってぇ〜〜！！」

「いつまで寝てやがんだツナ。仕事しろ」

「リボーン……いきなり蹴ることないだろ？！」

「いつまでも机でふて寝してやがるからだ」

「十代目、風邪を引かれます。お休みになられるならそろそろお帰りになられたほうが…」

「大丈夫だよ。獄寺くん……起こしてくれて良かったのに…」

「正式にボンゴレボスになってからまだ日が浅いですから……慣れない仕事にお疲れかと」

「う・うん……まさかまだ学生の俺達にまで仕事回してくるなんて…」

「あたりめーだ。学生だろうがなんだろうが…お前はもうマフィアのボスなんだ。自覚しやがれ」

「だから……俺はマフィアのためにボスになった覚えはないっていつも言ってるだろ」

「ツナ！！いるか？」

「？！山本！」

「なんかよ。いまランニングから帰ってきたんだけど、校門にずけー怪しい人達立っててさ、声かけたらこんなのくれたぜ？！」

「声かけんなよ……手紙？」

「この印……」

「十代目、これ九代目からの手紙ですよ。」

「ん？そうなのか？んじゃ…さっきのボンゴレの人達か！」

「もう……高校まで来ないで欲しいよなぁ～目立っちゃうよ」

現在、ボンゴレ？世とその守護者達の拠点は、並盛にある。本来ならば、正式にボンゴレを継承されたところで、イタリア本部へ行くところだが…ツナや守護者達の希望により、ボンゴレ日本支部という形で、並盛で活動を行っている。
とはいえ…ツナ達はやっと並盛高校に上がったばかりで、もちろんアジトも存在しない。そこで、高校の会議室の１つを内密に拝借し、ボンゴレアジトとしてやっている……。裏で手回ししたのは何故か

雲雀らしい……ツナ達は改めて、雲雀が並盛の何なのかが気になったところだ。

「ツナ。手紙にはなんて書いてあるんだ？」

「えっと……え？！ボ…“ボンゴレ？世とその守護者は今週末…イ、イタリア本部に来るように”……だって…」

「え？！」

「急…っすね…十代目」

「ホントだよ…学校…」

「大丈夫だぜ、ツナ。今週末は創立記念日挟むから連休だ」

「そっか…なら、よかっ……いや良くないよ！！みんなに知らせなきゃ！」

「九代目のことだ。たぶん雲雀や骸には直接手紙渡してると思うぞ。来るかどうか保証出来ねーけどな」

「リボーン…他人事みたいに言うなよ！…ん～…大丈夫かな…あの2人」

「先輩には、俺が伝えるぜ♪ツナ」

「ありがとう。山本」

「大丈夫っすよ。十代目、骸はなんだかんだ…声かければちゃんと顔出しますし…雲雀は雲雀で後から個人的に来てるんで」

「う・うん……」

「んじゃ俺、ランニング戻るな！ツナ」

「ありがとう。山本！」

「にしても…急になんすかね？九代目…」

「ホントだよ…イタリア本部は、俺達の留守の間はヴァリアーに頼んでたはずだけど……」

「まさかあいつら…俺達の居ない間にっ！」

「ＸＡＮＸＵＳに限って…ないと思うけど…」

ヴァリアーより

＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋＋ボンゴレイタリア本部

「う〝おぉい！！ボスはどこだぁぁ！」

デカい声のボリュームとともに部屋に入ってきたねは、スペルビ・スクアーロ。ヴァリアーの特攻隊長であり、山本の剣の師匠でもある。

部屋の中にはその他、ベルフェゴール、ルッスーリア、レヴィ・ア・タン、アルコバレーノのマーモンがいた。

「シッシッシッ！！ボスなら今風呂だぜ」

「何ぃぃ？！」

「あらスクアーロ、どうかしたの？」

「悠長に構えてる暇はねぇぞぉ！沢田達が帰ってくんだよ！！」

「「「？！」」」

「うげっ…まじ？」

「ちょっと～早く言ってよ～！！」

「ボスの準備をしなくては！」

「あの六道骸がくるのかい？……ボス…」

「騒がしいぞ…カス共が…」

「ボッ、ボスゥ！！ふ、服をォォ！！」

「シシシシ！黙れよ変態。ボス～あのボンゴレ十代目が帰ってくんだってよ～」

「……」

「どおすんだぁ？！ボス」

「カスが……迎えてやれ……手厚くな…」

「「「「了解♪」」」」

本部へ

ツナ率いる十代ボンゴレファミリーは、イタリアにあるボンゴレ本部に到着した…。とはいっても、雲雀恭弥と六道骸は別行動。沢田綱吉・獄寺隼人・山本武・笹川了平・ランボだけで先に上陸するかたちになった。

「お帰りなさいませ！？世」

「お帰りをお待ちしておりました！」

「長旅ご苦労様です！」

「守護者の皆様もお疲れ様です！」

「ボス！お帰りなさいませ！」

ボンゴレ本部に仕える部下達の丁寧な出迎えに、ツナはいまだに慣れないところがあった…

「ははは…俺達…日本で特になんにもやってないんだけどな…ツナ」

「ホントだよ…どうにもまだ違和感が…」

シュッ！！！

「「「「？！」」」」

「十代目っ！」

「ツナ！」

「下がれ！沢田！」

「え？！」

獄寺達がツナからかばったのは…飛んできたナイフだった…

「シシシシ！さすがに継承しただけあって…少しは成長してるじゃん？！」

「……ベルフェゴール…てめえ」

「チャオ！まぁ…ガキの時に比べたらイイ面構えになったじゃん♪獄寺隼人…」

「っ！」

「まぁまぁ獄寺、ツナに怪我がなくて良かったじゃねーか☆」

「相変わらず甘えヤローだぁ…山本」

「スクアーロ！久しぶりだな！」

「ったく…甘ちゃんがぁ」

「あら～☆笹川了平じゃないの～♪」

「おう！極限に元気にしてたか？ルッスーリア！」

「なんだ…六道骸はいないのかい？」

「残念だったなバイパー…骸の奴は後から合流する」

「何度言えば分かるんだ。僕はマーモンだ」

「……。」

「……XANXUS……」

「……。」

「ひ、久しぶり……本部の監視…どうもありがとう…」

「てめえんとこの雲の守護者がいきなり来やがった……なんのつもりだ」

『雲雀さんが？……先に到着してたんだ』

「えっと……実は九代目から、守護者全員本部に集まるよう手紙が届いたんだ……だから…」

「……行くぞ……カス共…」

「バイビ～♪」

「沢田ぁ…事が全て終わったら連絡入れろぉ」

「うん。ありがとう、スクアーロ」

「雲雀が先に来てたんだな！」

「みんな…本部に入ったからには、各自一回部屋に戻って指定スーツに着替え、会議室に来て」

「了解しました。十代目」

「OK！」

「すぐ行く、沢田」

「ランボは、俺の部屋においで。俺が着替えさせてやるから」

「は～い☆ランボさん！スーツ着ちゃうもんね♪かっこいいもんね～」

「じゃ…約１５分後くらいに会議室へお願いします」

「「「了解」」」

守護者集合

ツナとリボーン・ランボは会議室に向かっていた。
ツナは代々ボンゴレボスに受け継がれしボンゴレ?世のマントを羽織り、ランボは雷の守護者と分かりやすく、グリーンのシャツを身に付けスーツ姿に着替えた。一方のリボーンはいつもの同じのスーツだ。

ガチャ

「?!あれ」

「……やあ」

「雲雀さん！」

先に部屋に入っていたのは、雲雀恭弥。十代目雲の守護者である。
雲雀も、雲の守護者と分かりやすいようにヴァイオレットのシャツに身を包んでいる

「チャオッス♪久しぶりだな。雲雀」

「元気だったかい？…赤ん坊。」

「雲雀さん……先に本部に到着してたんですね」

「六道骸と一緒に本部入りするのは嫌だったからね…」

ガチャ

「お待たせしました。十代目」

「なんだ。もういたのか雲雀」

「極限に早いな」

「君達が遅いんだよ」

レッドのシャツの獄寺、ブルーの山本、イエローの笹川と…各自属性の色のシャツに着替えゾクゾクと会議室に入ってきた。

「十代目、残るは骸だけです。」

「う～ん……リボーン。どうしよう」

「いつ来るかわかんねーからな。先に話しちまえ」

「そ・そうだね……さっき、全員の本部入りの報告も兼ねて、九代目に電話入れたら…」

主旨

「さっき、九代目に俺達の本部入りも兼ねて連絡したら……頼み事をされたんだ」

「頼み事っすか？十代目」

獄寺だけでなく、各自先の話が気になるようだ。

「う、うん。俺も初めて聞いたんだけど…ボンゴレでは、新しい代に変わるごとに、ボスをはじめ各守護者も、肖像画として写真を１人１人撮るみたいなんだよね……」

「「「え・」」」

「いやだ」

雲雀だけでなく…みなあまりノリ気ではないらしい…

「ツナ……いくらなんでも…さすがにそれはちょっと、恥ずかしいぜ」

「うむ…極限に俺達死んでしまったみたいではないか！」

「それはいうな」

「だ…だよね…。でも、先代から…通ってる道…らしい…」

「帰る」

「雲雀ーーー！！」

「お前だけ逃げる気かぁー！！」

「我慢しろ！俺達だって恥ずかしいっ！」

「ちょっと……離してよ…」

「やっぱりこうなったな。ツナ」

「はぁ〜…リボーンも、長く九代目と付き合ってるんだから知ってたはずだよな…」

「ああ。まぁな」

「言えよ!!」

「お前等もグチグチ言ってねーで、とっととパシャリと撮って日本帰ればいいじゃねーか」

「…こ、小僧…」

「完全に他人事っすね…リボーンさん…」

「うむ…だが一理ある!並盛に飾るなら遠慮したいが、イタリアの

本部なら俺達はほとんど顔も出さんし、あってもなくても同じなのではないか？」

「くだらない…僕は帰るよ」

「その写真撮影だがな……全て終わると世にも珍しい、面白いものが見れるらしいぞ。」

「「「「？？」」」」

「ワオ……僕を退屈させないものかい？赤ん坊…」

「ああ。保証するぞ。雲雀」

「イイネ…じゃここは、そっちの一興に乗らせてもらうよ」

「ひ、雲雀さん……」

「あいつあれでいいのかよ……」

「あはは！意外と単純なのな♪雲雀」

「極限に褒美に弱いな……」

クフフフ……随分面白い話をしているじゃありませんか

「「「「?!」」」」

「骸!」

「……ふん。」

「お久しぶりです。沢田綱吉」

「あ、うん。久しぶり…クロームは元気?」

「そんなことより先ほどの話……僕も乗らせて頂きます」

「え?!写真の話?」

「意外だな。骸」

「クフフ…なぜです？アルコバレーノ」

「マフィア嫌いのお前がマフィアの肖像になる写真撮影をするなんて思わなかったぞ」

「クフフフ…この僕だって本来なら御免被りたい所ですがね……愚かなマフィアボンゴレの軌跡をこの目で拝見しておくのも面白いかと。」

「…しょうがね…雲雀に骸が乗る気なんじゃ、俺達がやらねー訳には行かねーよな」

「十代目がやるんでしたら、俺は勿論やります。」

「ランボさん！パシャパシャ写真い～ぱい撮るもんね♪♪」

「ランボ、俺達は撮る側じゃなく撮られる側だ」

「ブー。つまんないのー」

「えっと……わ、分かりました。じゃ決まったところで……とりあえず、肖像写真が飾られる場所まで行きましょうか」

肖像写真

……

「ボンゴレにこんな部屋あったのな」

「うむ。普段はこんな奥まで来ないからな…」

「暗いもんね～」

「「……。」」

「十代目、こちらの部屋ですか？」

「う、うん。」

「俺はここで待つぞ」

「えっ？！ちょっと、リボーン」

「この扉の先は、ボンゴレボスとその守護者のみが入れる場所だ…
…あくまでヒットマンの俺は入れねぇ。」

「はぁ……わかったよ…みんな、いい？」

全員頷くと、ツナは、扉の取っ手に手をかけ扉を開けた

ギィ……

「すっげー！」

「極限に感無量だな！」

山本や笹川が驚くのも無理はない。
中に入ると横幅も奥行きも広く、上には、巨大な眩いシャンデリア。
横の壁には、ボンゴレ？世代をスタートとして、？・？・？・？・？・？・？世代の各守護者たちの肖像写真、そしてレッドカーペットの真っ直ぐ進んだ一番奥には、組織を支えてきたボスの写真が飾ってある。中でも……イタリア自警団として確立した『初代ボンゴレファミリー』の写真が最も大きく、最もその存在感を漂わせていた……

「写真いーぱいだもんね！！」

「十代目、さすがに…これは…」

「うん…圧巻だね…」

「クフフ……目が眩しいですよ」

「……。」

「ホントすげーな♪見てみろよ獄寺、各守護者ずつ写真が分かれてんな」

「ああ…中央の大空を核として、時計回りに嵐・雨・雲・晴・雷・霧の順番か…」

「うむ……やはり写真を撮るのが極限に恥ずかしくなってきたな」

「お、俺もだぜ」

「情けねぇな…男に二言はなしだ」

「わかってるって！」

「……？どうしました？十代目」

「……うん。なんか…まじまじとボンゴレ？世を見た気がするなぁって。」

「ああ、確かにな！」

「ボックスを開けるための継承時は、極限に時間が短かったからな」

ツナや獄寺たちは、いつの間にか…各初代の肖像写真の前にいた…

獄寺隼人は、初代嵐の守護者『G』

山本武は、初代雨の守護者『朝利雨月』

笹川了平は初代晴の守護者『ナックル』

雲雀恭弥は初代雲の守護者『アラウディ』

ランボは初代雷の守護者『ランポウ』

六道骸は初代霧の守護者『D・スペード』

そして沢田綱吉は、初代ボンゴレボス、ボンゴレ?世こと『ジョット』の前に……

『ボンゴレにいる限り…一度でいいから、?世とゆっくり話がしたかったな……』

「「「「?！」」」」

ツナがそう思ったのと同時に、皆のリングから、それぞれの属性の色の炎が溢れ出す

「なっ！リングが！」

「熱いぜ！」

「……この感じ…」

「百蘭戦の時と同じだぞ！」

「ぐぴゃ？！」

「何ですか？これは、沢田綱吉……？！」

ツナの全身を、オレンジの炎が包み込んでいる…

「なっ！！何これ！」

「十代目！！」

「ツナ！」

「沢田！」

「？！みんな！」

ツナ同様、獄寺には赤、山本には青、了平には黄、雲雀は紫、ランボは緑、骸は紺の炎が身体を纏ってしまっている

「ツ〜ナ〜！！！」

ボッ！！

「「「「？！」」」」

「お、おい…ランボが消えたぞ?!」

「極限にどうなってる!」

「ランボーー!!」

「くっ!」

「む、骸!!」

「っ！」

「おい！雲雀！」

「雲雀ーー！！」

「そんな、雲雀さん！！」

ランボに続き、骸、雲雀までも炎に飲まれ姿を消してしまった

「う…おっ？！」

「先輩！！」

「お兄さん！！」

「ツナ！」

「山本！！」

「ツナ！訳わかんねーけど、逃げろ！！」

「山本！！」

「そん……山本まで……？！！獄寺くん！」

「十代目！！」

「消えないで！獄寺くん！！」

「十代目っ」

ボッ！！

「獄っ……みんな……？なんで…」

貝は代を重ねその姿を受け継ぐ

「？！！」

リングに刻まれし我らの時間

ここに　いま…

ツナの床に浮かび上がったのは、ボンゴレの紋章……ツナはそれを見たのと同時に、守護者たち同様炎に包まれ姿を消した。

初代

「っ！いっつつ……？？ここ…どこ？」

ツナが炎に包まれてから目を覚ました時……場所は、ボンゴレ本部ではなかった。どこかの……異室…

「そうだ……みんなを、探さなきゃ！」

目を覚ましたか？？世。

「？！！」

ツナの目の前に現れた男…ツナと同じマントを身につけ、金色に輝く瞳と髪、手にはグローブを付けている……その甲には、『？』のマークがある。

「プ…リーモ…？」

「久しぶりだな…」

「え、え？！！なんで？！」

「大きくなったな…デーチモ。マーレの小僧との戦いの時以来か？」

「は、まぁ……プ、プリーモさん…なぜ」

「ん？お前たちが俺たちを呼んだのだろう？“この部屋で”」

「この部屋？いや…俺たちは、ボンゴレ本部の一番上の奥にある大きな部屋で」

「ああ。その部屋がここだ」

「？？？」

「お前たちの“時代”では、肖像画が飾られているんだな…驚いたぞ」

「お前たちの…時代？？」

「この時代じゃ、この部屋は俺たちの会議室なんだ」

「この時代？会議室？……ち、ちょっと待って下さい！！もしかして…ここ…“過去”？！！」

「その通りだ…デーチモ。」

「なんで?!なんで?!」

「デーチモたちは、ボンゴレリングにだけもたらされる“縦の時空軸の奇跡”にあったんだ。」

「?!百蘭戦の時の」

「あの時は、どうしても俺たち側から、お前たちの前に姿を現したかった。ボンゴレリングの原型に戻してやりたくてな」

「あ!あの時は本当にありがとうございました。プリーモさんたちがいなかったら、百蘭にも勝てなかったです……」

「なに。俺たちの意志を継承してくれているんだ。あれくらい、なんてことはない」

「それにしても…俺たちは、ボンゴレリングの奇跡によって、過去に来ている。と」

「もどかしい話だが……お前たちの時代では、俺はすでに死者の身。リングの意識としてだけじゃ、俺たちはお前たちの力になってはやれない。だが…お前たちは生者。だからシッカリ過去まで飛ばされたのだろうな」

「ここが……古いボンゴレ……」

「お前は言ったな…一度ゆっくり話をしたかったと。その意見には俺も同感だ」

「っ?!みんなは…」

「……悪いな…デーチモ。守護者たちは、俺のファミリーの所に各自飛ばされてしまった。」

「え、じゃあみんな……初代守護者たちのところに……?」

出会った先で

「ツ～ナ～！！ツ～ナ～！！」

「……。」

「どこ一だあーー！ツ～ナ～！」

「っ～～あ～もう！うるさいものね！！」

「ぐぴゃ！」

「なんで俺様がこんなガキの面倒見なきゃなんないんだものね」

「だから！ランボさんをバカにするな！」

「大体…何しに来たわけ？」

「ランボさん、お前なんかに用ないもんね」

「…ムカ……じゃなんでここにいるのさ」

「ランボさん、面白そうだからツナについてきただけだもんね！どこだもんね！お家帰る！」

「さっきからツナツナツナ……なに？缶詰め？」

「ツナ～～！！」

「……うざ」

……

「ん……？！ここは」

「動くな動くな。先ほど頭を強打したんだ」

「？！…なんの…これしき。……それより、極限にここはどこだ？」

「究極に俺の家だ」

「……この声…？！お、お前っ」

「ああ。究極に久しぶりだな！笹川了平」

「し…初代晴の守護者…ナックル…なのか？…夢でも見ているのか？？」

「ははは！相当混乱しているな。まぁ、無理もない…驚いたぞ…任務のため城を出ていたが、いきなりお前が上から降ってきた」

「なに？！」

「その時、床に頭を打ってそのまま気を失ってしまったんで、家に一度連れて帰り様子を見ていた」

「うむ……俺達はボンゴレ本部で…写真を見ていたはずだが」

「プリーモから事情は全て聞いた、今から簡単に説明する。究極に落ち着いてよく聞けよ」

「頼む！！」

……

「いやあ…すんません。すっかりご厄介になっちまって。」

「なんのなんの。御主と拙者の仲でござる」

「けど、任務の…途中だったんじゃ」

「他の者の任務に比べたら何てことないでござるよ。プリーモから、日本から持ってきてほしいと頼まれていたものがあって、渡すだけでござる」

「へえ…。しっかし、うまいっすね♪この和菓子とお茶」

「ほお、山本殿はこの味が分かるとは！なかなか肥えた舌でござる」

「えへへ♪まぁな。うちは寿司屋だし」

「……そうでござったな…」

「故人のあんたにも、俺ん家の寿司、食ってもらいてーなぁ」

「……山本殿、先ほど話したここへ来た経緯は概ね理解出来ただろうか」

「……ああ。…他のみんなも、大丈夫だといいんだけどな…」

「…拙者が知る限り…まずプリーモたちは大丈夫であろう。普段は城にいるでござる」

「城…って…」

「そなた達でいう、ボンゴレ本部でござる。沢田綱吉殿も、おそらくプリーモと一緒であろう」

「……ほっ。ツナ…良かったぜ」

「……。あと…他の守護者だが…、ランポウは元々サボリ癖のある性格がある故…おそらく任務サボって家にいると思っているでござる。最近はどうも反抗期らしい」

『んじゃ……ランボもひとまずは大丈夫かな…』

「ナックルは城を出て任務をしている…少し心配でござるな。厄介な任務ではないとは思うが……」

「……先輩…。」

「あとはGでござる。プリーモのためとはいえ、いつも危険な橋を選んで渡ろうとする……。今回も喧嘩事に首突っ込んでいないといいのだが…」

『獄寺そっくりだな…』

「あと…D(ディモン)でござるな」

「霧の守護者…骸がいるな…」

「デイモンも大丈夫だと…言いたいところだが…調べ物をしていて、守護者の中では一番城と離れてしまっている…連絡が取れづらいのが困りものでござる」

「調べものっすか？」

「デイモンは、ボンゴレで人一倍仕事熱心でござる。」

『……ん？…小僧からは、初代霧の守護者D・スペードは、裏切り者だと聞いてたんだけどな…？間違いなのか？』

「えっと…最後、雲の守護者は？」

「…ああ、アラウディ。う～ん……実は、アラウディの行動範囲・心理に関して、拙者達では、少々把握しきれていないところが昔からあるでござる。任務は毎回きちんとこなしているのだが…一体ど

こで何をしているのやら…」

『……雲雀そっくりだぜ…まぁ、雲雀に限ってヘマはねぇと思うけど…』

「そう心配さなれるな、山本殿。いざとなっても我々初代の守護者がそばについているでござるよ」

「あ、はい……そうっすね。ありがとうございます。雨月さん」

出会った先で（後書き）

朝利雨月の他の守護者たちに対する一人称がわからない（「・・」）
仲良さそうなんで呼び捨てで……今決めた（笑）

ツナ達が飛ばされた時代は、ボンゴレ結成全盛期なので、Ｄもまだ反感を持つ前……って設定今決めた（笑）せっかくだからエレナ出そうかな…
あ・知らない方すいません（「３」）リボーン最新巻読んで（笑）

次回はいよいよ！みんな大好き♪雲雀＆ａｍｐ；アラウディ！骸＆ａｍｐ；Ｄ・スペード！
そして自分大好き☆獄寺＆ａｍｐ；Ｇ

出会った先で？

『なんで俺がこんなことに！！』

一方…嵐の守護者、獄寺隼人はイタリアの路地裏…何故か、貴族のお付きに追われていた

『チクショ！俺が何したってんだ！！』

グイッ！

「?!!」

獄寺は、後ろから不意にフードを掴まれた

「ったく、てめぇは…過去まで来て何してやがんだ。」

「?!な!G?!」

「シッ!」

「「……。」」

「……巻いたな。イタリアの道は入り組んでる。しばらくは見つからねーだろ」

「…ホントに…G、なのか？」

「あ？見りゃわかんだろ」

「なんで、てめぇが…いや…そんなことよりなんで俺はイタリアにいんだよ！」

「少し落ち着け、バカが。ちゃんと話す。」

「……十代目は…」

「……はぁ…安心しろ。さっきプリーモに連絡とった。デーチモはプリーモと一緒に城にいる」

「…そうか。良かった…」

「俺の任務は一時中断だ。少し距離はあるが、城に戻るぞ……歩きながら話す。」

「……ああ。」

……

「…お茶です。」

「…お気遣いなく。」

「「……。」」

『『何ですかこの沈黙は…』』

「……D・スペードと言いましたか。初代霧の守護者。」

「…そうですが？」

「僕は、こんな書物に溢れかえった部屋に興味はないのですが…」

「ヌフフフ…君が興味あるのは、ボンゴレ。…ですか」

「わかっているなら、とっとと案内してほしい」

「まぁまぁ…形はともかくとして、せっかく十代と初代が顔を会わせたのです。ここは、ゆっくりしていても罰は当たらないでしょう……」

「……はぁ…それは…まぁ」

『…どうなっている？この男。以前継承の時に一戦交えた時や、未来での戦いの時の記憶の印象とはかなり違う……』

「霧の守護者…六道骸で、いいんですよね」

「あ。…ええ…」

『…これは作戦か？それにしても、奴の目つきも…少し』

「すみません。仕事の途中なので、待っていてもらえますか」

「構いませんよ。……僕も少し、考えることがありますから」

『…D・スペード。今までに僕が見てきた人物とは明らかに“何か”が違う…霧の術士と言えば、文字通りの性格は変わっていないが…確かこの男、初代ボンゴレボス、ボンゴレ?世のやり方に不満を持っていたようだが……今はどっちかというと……?!少し……“若い”?』

……

『……この町並みは、日本じゃないな…』

雲雀は、一人ゆっくりとイタリアの町並みを歩いて眺めていた。しかし、雲雀のいるその町並みは……あまり見映えのいい感じでない。…人があまり町を歩いていない。人は見受けられるが、見た限り…お高くとまってる貴族のように見える…

雲雀も今は立派なスーツを着ていてなんとか浮いてはいないが、その貴族らの服は…雲雀からみたら、“無駄な装飾が邪魔くさい”“町並みに全く合っていない”

ガシッ

「？！！」

「あ……」

『？子供…』

雲雀の袖を掴んだのは、子供だった。だが、服も髪も、歩き回っている貴族らとは天と地ほど差があり質素で薄汚れている…

「……なにか用」

「あ……アラウディさん……」

「？」

「おいおいこのガキ、どこから湧いて出やがった？」

「イヤだ！イヤだ！キタねー手で貴族の服に触んじゃねーよ」

「っ…あ…ごめんなさ」

「……。」

さっきまで歩いていた貴族が雲雀と子供に絡んできた。するとすかさず一軒の家から女性が出てきた

「アラン！！何してるの！……も、申し訳ありません！」

「……。」

「金ロクに稼げねード庶民が貴族の服掴むとは礼儀がなってねーな！な！兄ちゃん」

「……。」

「あ…あなたは…アラウディ…さん？」

「？」

「おいあんた、このガキの母親か？この兄さんの袖、お前んとこのガキが握ったせいでシワになっちまったぜ」

「っ！」

「クリーニング代払いな！筋っつうもんだろ？！それが」

「あ…あの…うち…この家の敷地の滞納もありまして…生活がっ！それに最近は物価も…」

「そりゃ…金がないからいけないんでしょうが。私達を見なさいな！土地が高かろうが、物価が高かろうが、こうして立派に生活を成している」

「っ…。」

「……。」

「んじゃ母親のあんたが責任とるんだな！ド庶民の方が、アイロンかけるのがうまいだろ？！」

「あっ！！」

「カラダで責任とれ身体でっ！」

「いっ痛い……」

バキッ

「「「「?!!」」」」

「君たち、僕の前で群れるなんて…イイ度胸だね…」

「ト…トンファー…」

「きっさま！！誰に手を出したかわかっているのか！」

「…さあ？誰、君。」

「なっ……何？！」

「君は…女性の風紀を乱した鉄槌も下さないとね」

「なっ！」

「さぁ……誰から噛み殺そうかな…」

「わ…私達は…君の袖を掴んだそのガキを叱ってっ！」

「僕は頼んでないし、大きなお世話だ。それに、子を叱るのは他人じゃない。親だ」

「……っ！」

「それに、君たちのは叱るとは言わない。何て言うか知ってるかい

?……“腹いせ”っていうだよ」

「「「「……。」」」」

貴族達はぞろぞろと引いていってしまった。雲雀にしては珍しい、“威圧”と“口”説得だった。
雲雀はさっさと歩き出したが、再び子供に袖を掴まれてしまった。

「……。何」

「ありがとう！ありがとう！やっぱり強いや！アラウディさん」

「本当に、なんとお礼を申し上げましょう。アラウディさん“達”が姿を現してからは、この町も前ほど廃れなくなって…」

「違う」

「「？」」

「僕は」

人違いだ

「?!」

「アラウディ……さん??え?」

「その青年はジャポーネから来た。」

「お母さん…アラウディさんが2人いるよ…」

「ほ、ホント……ご、ごめんなさい!間違えてしまってっ」

「……。」

「今日は、ボンゴレ門外顧問より通告があってきた」

「……はい。」

「本日より、この市街は門外顧問の管理下とさせてもらうことになった。以後、依頼・要望・意見等は門外顧問を通し願う……。」

「?!……ほんっ……本当ですか?アラウディさんっ!」

アラウディは静かに頷くと、子供の母親は手で顔を覆い嗚咽し泣き始めた。アラウディは、そんな母親の姿を何も言わずただ見つめていた。……雲雀も。

「ありがとうございます。ありがとうございます！よろしくお願い致します！ありがとうございます」

「まだ早い…これからだ。君たちには、今まで以上に頑張ってもらわなければ、我々が管理下に置く意味がない」

「はい。……はい、そうですね」

「以上だ」

「アラウディさん！！」

「……。」

「今度、僕んちのパン食べにきてよ！！サービスするからさ！」

「……。」

「“みんな”誘ってさ！」

アラウディが少し不服な顔をすると、先ほどまで泣いていた母親は、
美しい笑みを浮かべながら、

「ぜひ、みなさんには内緒で“お一人”でいらして下さい！」

アラウディは少し、柔らかい笑みをこぼし

「僕の舌を満足させてくれるかい？」

「もちろんです！」

「…ここのパン屋は、この町中じゃ少し名が知れてる“らしい”だからね……。楽しみにしてるよ」

アラウディはそういうと背を向け歩きはじめる……

「雲雀恭弥…今回の件を説明するよ。」

「……。」

去り際雲雀にアラウディはこう告げるとそそくさと歩く。

雲雀は黙ってアラウディの後ろを歩いた。雲雀は後ろを振り向き、先ほどの母親と子供をみた。……2人は抱き合いながら、歓喜の涙を再び流しあっていた……

イタリアの町と1人の青年

「デーチモ、いい知らせだ。」

「え？」

「俺の仲間達から連絡があった。お前の守護者達は無事だ」

「？！…はぁ…よかったぁ～！」

ボンゴレの拠点といえる城にいるのは初代ボス、プリーモ（？世）のジョットと、十代目ボス、デーチモ（？世）の沢田綱吉だ。ツナはプリーモの勧めもあって、城で自分の仲間の安否を確認することにした。とはいえ、見知らぬ土地、ましてや過去のイタリアとなると…仲間達の安否は気になった。プリーモの無事だという言葉に不安が1つ消えた……だが…もう1つツナには不安があった

“どうやったら元の世界に戻れるのか……”

プリーモのいう…ボンゴレリングだけに起こる“縦の時間軸の奇跡”なら今回のタイムトラベルは頷ける。未来の百蘭戦で、ツナ達の絶体絶命のピンチに、プリーモ達はリングから姿を現し大きな力を与えてくれた経験があるからだ。しかし、プリーモ達はすぐに姿を消し、長居はなかった。プリーモはあの時確かに“真の後継者に力を貸してやりたいが生憎それは出来ない”と言った…。それはつまり、プリーモ達はツナ達の世界において物理的影響をもたらすことは出来ないということと考えられる。だが……今回のツナ達は違う…物に触れる・食べれる・飲める。プリーモ達の世界で完全に物理的に干渉してしまっている。ツナにはこの違いが全く分からない。

「デーチモ、どうした?」

「あ…いえ、早く…みんなの顔がみたいなぁ〜…なんて…」

「クス……デーチモは、本当に仲間想いだな。」

「あはははは……」

「心配するな。俺の仲間達が、お前の守護者達を連れてくるよう言

ってある」

『……そういえば…』

「あ・あの……」

「？」

「ずっと気になってたんですけど……皆さんの“出会い”ってなんなのかなぁ～…って。」

「？俺達のか？」

「あ・はい。皆さんが1人1人、ボンゴレに加わった理由っていうか…ボンゴレの誕生について」

「！ああ。」

「あ…いや、話にくい話なら、いいんですけど。」

「話難くなんてないさ…しかし、考えてみれば、他人に話したことはなかったな…」

「そ…そうなんですか？」

「ああ。なんせ、最近はそんな話をし合うほどの時間もさけていなかった」

「お、お忙しいですよね……」

「……そうだな…歪んでしまったイタリアを正すのは容易ではなかった。」

「歪んでしまった…イタリア？」

「イタリアは、大きく貴族か平民で構成されている…場所によっては農民もいるかもしれないが…大体は貴族か平民だ。貴族の中でも上級・中級とさらに分かれる。」

「はぁ…」

「俺とGがお馴染みなのは知っているな…」

「あ・はい。最初は2人でボンゴレを築き上げたって」

「ああ。実は、俺もGも元は貴族だった…この町は、俺とGの生まれ故郷なんだ。」

「…え、貴族?!」

「貴族とはいえ、俺達の末裔がな…だから他の貴族とは違い、権も財も雀の涙程度だ……だが、やはり幼い頃は他の平民の子より、衣食住・学問には困らなかったな……。Gとは以前からご近所だった。俺もGも…この町が大好きだ。

人々はみな温かく、子にも大人にも…貴族・平民隔たりなく優しかったからだ。みな生活は楽とはいえなかったが、町全体に絆があり、“笑顔”だけは耐えなかった。その当時…“まだ”貴族の者と平民の者では生活に大きな差があったため、互いに干渉することはなかった。」

ツナは、プリーモの人柄はこの町の人達の温かい力のおかげなのだと、聞いている自分も温かい気持ちになった。

「だが、徐々に貴族側はそういう訳にもいかなくなってきた……」

「え??」

「デーチモ、平民と貴族との違いはなんだと思う」

「え?!う〜〜ん……財産…ですか?」

「その財産をより多く手に入れるために、人々は何をする?」

「働きます」

「そうだ。」

「？」

「貴族と平民では金の稼ぎ方が大きく違う」

「？！」

「貴族とて、何もせずただワインを片手にのんびりしているだけでは金は湧いては来ない。使えば無くなる。無くなればまた作らなければならない。」

『た・確かに』

「平民は、店さえあれば労働力…つまり“働き口”がある。働き口があれば収入がある。収入があれば人は物を買う。物を買えば店は儲かる。それが社会だ」

「はい。分かります」

「しかも、この町は絆がある。困ってる人は、放ってはおけない。そういう人達なんだ」

「……。」

ツナは、昔の日本も似たようなものだったのかなと思った。近隣との交流は、昔の日本もあったのだから……

「だが、貴族の社会は違う…色々あるが、主に他との契約で成り立ってる所が多い。」

「貿易みたいですね」

「そうだな。その貿易の会社のオーナーも数多くいる。いや……貴族はそういった形の方が多いかもしれない…貴族の生計と国の状勢は隣合わせなんだ」

「国事態が不況だと貴族達の生活も苦しくなることが多いってことですか？」

「そんなところだ。貴族も悠長にしてられなくなった……そして標

的にされたのが、町の人々だ」

「えっ？！な…なんで…」

「貴族には、貿易会社のオーナーなどいるが…町の地主も数多くいた」

「地主……」

「そう。町で店を構えたりしている人々の土地の所有者だ」

「？！土地の価格の請求を高くしたんだ！」

「……。」

「そ、そんな…」

「それだけでは飽きたらず、貿易に携わる者は物価をあげる……当然町の者達は材料費やらに出費が重なり、店を続けられにくくなる」

「町のみんなが造ってきたバランスが崩されてしまったんですね…」

「……そうだ。貴族の者は、この手口に味をしめ、不況だろがなかろうが所構わず金を町のみんなから貪り、食らいつくようになった。」

「ひどい……ひどいよ！そんなのっ」

「俺もGも、見ていられなくなっていた…すでに、町から笑顔はなく…一番ひどい時で一軒も店を開いていないときがあった。だが、貴族の連中の金の取り立ては続く……俺もGも、まだ若かったが、貴族の端くれだ。この力を使って、この状況を打破できまいかと、毎日語り合っていた……」

“貴族という強者の立場を、弱者のために使う”

ツナは、以前、九代目からプリーモ“ジョット”と相方“G”がボ

ンゴレを結成したのは、まだ十代前半の話だと聞いたことがあった。十代の若者が、“国の在り方”を変えようというのだ。ツナは、自分がもし、プリーモの立場なら、当然踏み切れない考えであり、行動するなんてそんな勇気…自分のどこから湧くのだろう…と思った。

「ボンゴレという組織を立ち上げようと踏み切ったきっかけは、一人の青年にあったからだ。」

「…青年？」

「その青年とのきっかけは、町の者が、地主にイジメをあっていて、食うものに困っていると、小耳に挟み、微力ながら俺達が助太刀に行ったときだった。」

「……。」

「その青年が、そのイジメにあっている町の者の家に、“わざと”金を落としていったのを見た。」

「……わざと、ですか？」

「そいつも、俺達と同じことを考えていたんだ。……とても嬉しかった。この町には、まだ“諦めていない者がいる”“この国を変えたい”と思っている者がいると思えたからだ。俺達は、すぐ久しくなり、お互い、国のため…町のために、ガキはガキなりに…手と手を取り合い動いていた」

「……。」

「けれど…やはり所詮はガキの気休めに過ぎず、貴族達の町のみなへのイジメはエスカレートしていく一方だった。逆らえば暴力…もう、医者も警察も、脅され機能しない。」

「……っ。」

「そんなとき、俺達の友人の1人が殺された…」

「そんなっ！」

「店の商品を割引しなかったことで、暴力を振るわれたんだ……医者も警察も当然駆けつけられず……」

「たった……それだけのことで……ひどい…ひどいすぎるよっ！！」

「俺達ももう我慢の限界だった…。なんとかしてやりたいっ！…この命かえても。……そして、その青年は提案をしてきた」

“ジョット…自警団を創るしかない”

イタリアの町と1人の青年（後書き）

お気づきの方はいらっしゃいましたでしょう！

そう！地味に出しました！シモン・コザァート！！

組織

「……自警団…」

ツナは、プリーモから自警団を創るまでの経緯を聞き……自警団という言葉の重さを改めて噛み締めていた……。噛み締めていると、自然と口から言葉を漏らしていた。

「青年は言った…1つ、組織を創るには、並外れたリーダーシップの素質を持っていないといけないと。雨も嵐をも包み込んでしまう大空のように……そして、それは“俺”の中にあるといった。」

「……。」

ツナはその意見には賛同だった。このプリーモが、“ずっと”ボンゴレにいてくれたら……ツナは、何度そう思ったかしれない。

「だが、最初俺はリーダーになる気はなかった。」

「え？」

「俺は、すぐ人に情けをかけるし…組織という巨大なものの器にしては、度量が小さ過ぎると思っていた。何より、自信がなかったよ。俺は、Ｇの方が適任ではないか…と言った。もしくは、その青年だって…十分その素質はあった……」

『……俺がずっと感じてきた感情に似てる。プリーモも、そんなこと考えたんだ……』

「またＧが、俺をリーダーにすることになかなか首を縦に振ってくれなくてな…」

「え？！意外だ！」

「Gも、俺と同じことを考えていた…」

……

「プリーモの奴は、昔から優しいを通り越してお人良しだった。」

嵐の守護者、Gと獄寺隼人は、イタリアの狭い入り組んだ路地を、プリーモやツナがいる城目指して歩いていた……

「……。」

獄寺は、Gの話をただ黙って聞いていた…。

「そんなお人良しが、組織のボスになったところで、敵には舐められるし…いざという時迅速な判断ができない。気の緩みが命取りになる時だってある。プリーモが早死にするだけだと考えたんだ……」

「その自警団創ろうと言い出した奴にボス任せりゃ良かったじゃねーか」

「俺もそれを提案した。……ジョットは…俺を推薦していたが……俺は組織のてっぺんに立つ柄でもねーし」

「そしたら？」

……

「彼は言ったよ。“もちろん、ジョットだけには背負わせない。イタリアは広い。俺は南部の方を助けに行く。ここはジョットとGに任せる”とね」

「じゃその青年は、イタリアの南のほうに行っちゃったんですね……」

「ああ。近況と情報を互いに交換するためたまに文通はやってるけどな」

「へえ…。」

「俺とGしか残されていない。だが…やはりGはOKしてくれなかったんだ。Gとは本当に長いこと一緒やってきたが、あんなに互いの意見が対立したのは……最初で最後だったかもな。」

……

「俺は、長いことプリーモと一緒にいた…だからプリーモの人を惹き付ける力は誰よりも認める。だからこそ、あいつには組織のボスからは手を引いてもらいたかった」

「……。」

「イイ奴も、悪い奴すらも…あいつは許すだろう…もし命狙われたとしても……時を経たら、あいつは心開いてしまうだろう。そんなんじゃいくつ命あってもたんねーし、俺は、ジョットを危険な目にだけは遭わせたくなかった」

『……十代目と同じだ…。かつて十代目の身体を手に入れようと戦ってきた骸。完全に消しにきたＸＡＮＸＵＳ。だが十代目は…骸を霧の守護者に、ＸＡＮＸＵＳには本部までいま任せてる始末。十代目は……確かに心の広いお方だ。“人”を大切にするあのお方だからこそ、俺も命捧げてあの人に付いていける。だが…十代目は時々自分を省みず、身の危険の中に自ら向かっていかれる時がある。

ヒヤヒヤした瞬間は何度かあった。……だが…だったら…』

「その様子だと、デーチモにも似たようなことがあるみたいだな」

「……ふん。」

「だったら分かるだろ。最初、俺がジョットをボスにさせたくなかった心境が」

「わかんねーな」

「？！」

「悪いが俺にはわからねー…確かに、俺も十代目が継承なさるとき、今までに感じたことのない“不安”っつうものを感じたけど、それは……十代目がどうこうじゃなくて“俺”が未熟だからそう感じるだけだと思った」

『……。』

「十代目が危ない時は、俺が守ればいい。十代目が迷っているときは、俺も一緒に考えればいい。継承前日、正直、あの時の俺には…そう考えることが出来てなかった…。この身全て捧げて十代目と共にボンゴレをまとめ上げる力も知恵も俺に備わってる自信がなかった……。だが…十代目はそんな俺でもいいと言ってくれた…。あの方は、いつもありのままの俺達を信じてくれてんのに、その俺達が未熟なんて考えてんなんて情けねぇ話だ。俺は、“未熟な自分”を考えるのを止めた。あとは…もう簡単だ。十代目のお側に立ち、お守り続ける、死ぬまでな。」

『……こいつ。』

「どうやら、十代嵐の守護者を少し甘く見てたみてーだな……。リングに継承の証を授けた時とは、随分変わったようだ」

「たりめーだ。いつまでもガキじゃねーぜ」

『俺がジョットの自警団のボスを許した理由は……ジョットが、町の奴の1人に“これからは俺達が町を守る。だから、全て安心して、みんなは…笑顔でいてくれ”と言ったときだった。あの時のジョットの目は…たぶん、一生…忘れねーだろうな。こいつは……最初からデーチモに“賭けて”たのか。さすがは、俺達の意志を継ぐ者と

いったところか…。』

……

「Gは…どうしてボスになることを許してくれたんですか？」

「……さあな？」

「えっ？！」

「“どうせお前のことだから、無茶ばかりするだろ、俺は側で援護する”だと言っただけだからな……」

「……はぁ。」

「まぁ…なんとかそれで、自警団を開始することが出来た。初めは、

ボンゴレの名はなかった…初めるからには、その前に人を集めなければならない。俺とGは、とにかく町の人々に自警団の宣伝がてら、適正な人物はいないものかと聞き込みをすることにした」

「自警団の…宣伝？」

「ああ。町の人に受け入れてもらわなければ…意味がないからな。だが…世の中はなかなか、上手くいくわけではなくてな……。所詮ガキに何が出来ると何度言われたことか……。言われるたびに、フォローを入れてくれたGがいてくれて、本当に助かってな。」

「だから、挫けず頑張ってこれたんですね！」

「ああ。もちろんだ……。……そんなある日、ある1人の男の話を聞いた。」

「ある1人の男？」

「その男は…“たった1人で”この国と戦っていた…その名は」

―アラウディ。

…孤高の…

「アラウディ……」

『確か、初代雲の守護者の人だ……。』

「アラウディは、俺達より少し年上だが…聞くところだと、その若さにして歴代最年少で国の諜報部のトップを務めていた…」

「…諜報？」

「諜報とは、様々な情報を探ったり知らせたりする人のことだ」

「？！スパイってこと？」

「そうともいうな。」

「す…すげー…」

「ああ。すごいことだ…。アラウディの家では、代々諜報部を受け持っているらしい、だから、当時アラウディの名はかなり表の世界でも裏の世界でも知られていた……。」

「それって……スパイとしてはどうなんですか？」

「そう思うのも無理はない。だが……そこでアラウディがすごいのは、名以外の情報が全く露見されないことだった。」

「え？！絶対ですか？」

「絶対だ。だから、俺もGも苦労したさ…アラウディと名は知っているが、外見・年齢・性格等の特徴が分からないから捜しようがなかった。諜報部の情報なんてさらにガードが堅く、どのくらいの規

模で、どう活動しているかも不明…。とにかく、アラウディは本当に自分のことは話さない。部下にまで自分のことは話してないときく。まさに“掴み所のない雲”なんだ。」

『……やっぱり、初代と俺達って似てるのかな?……今の話聞いてると、雲雀さんそっくりだ。

』

「なるほど…でも、なんで“孤高の”浮き雲なんですか?」

「アラウディは…表の世界の情報の管理等は部下にやらせてるらしいが、裏の世界の情報や、現地へ足を運ぶ際は、必ず…トップであるアラウディ“1人”だけで行うんだ……」

「1人だけ……」

「そう。たとえ、戦闘になると見込んでも、必ず1人だ。」

「なんで、そんなこと…」

「これは…あくまで長年アラウディを見てきた俺の見解だが、たぶん、その方が“確実”だからだと思う」

「どういうことですか？」

「“信じるものは己のみ”ということだ…自分の力こそ、最もアラウディ自身が信じられるものだからだと、俺は思っている」

「……そんな」

「アラウディの立場上、俺は…アラウディのその思考は仕方ないと思っている。諜報部は…デーチモの言うとおり所謂スパイの世界。扱っているのが目に見えぬ“情報”というものだけあって…自分達がいつ弱い立場に立たされるか分からないから…気の抜けない世界だ」

ツナは…聞いて想像するだけで、胸が詰まる思いがした。そんな世界で、若くから身を置くアラウディは、どれだけ精神が強いのだろうと思った。アラウディがかつて、ボンゴレ最強の守護者と謳われた訳が、十二分に理解出来た瞬間だった。

「自分達の部下の中にも、もしかしたら…内通する者が隠れているかもしれない。
アラウディは…そこまで考えて動いていたそうだ…
―僕の邪魔者は…たとえ味方であれ、己の“正義”の下に叩き潰す―
これは、アラウディの口癖だ…行動するとき、必ず1人だけな理由が頷けるだろ？」

『なんか…さりげにすごい口癖聞いちゃったけど、』

「うーん……。なんか…可哀相な境遇の人だなぁって…思います。」

「そうか。…デーチモは優しいな。大丈夫だ…アラウディは、そんな日々が楽しくて仕方ないんだよ」

「……え。」

「そのスリルが、アラウディの生き甲斐であり…楽しみでもあるらしい。……クス…変わり者だろ？」

『っていうか、まんま雲雀さんだよ！！…雲雀さんがアラウディに似てるのか、アラウディが雲雀さんに似てるのか分からなくなってきた！』

「でも、そんなアラウディさんにどうやって出会って、どうやって自警団に入れたんですか？」

「うーん…正確にいうと、アラウディが正式に自警団として動くようになってくれたのは、大分後の話だ。たしか……半分自警団からボンゴレの名の話が上がってきたくらいのときだったかな……」

『遅っ！！』

「え・じゃあそれまで何を」

「いや…本当にアラウディを見つけ出すのに骨が折れたから、Gとの作戦で、アラウディから俺達に姿を現せさせようということになったんだ。」

「えっと…つまり？」

「自警団として、俺達の名が滞れば、諜報部としてアラウディが黙ってないだろうと踏み、アラウディから俺達に会い来るのを待とうということに決めた」

「な、なるほど……」

『プリーモらしいなぁ。』

「アラウディを自警団候補としておき、再び、俺達は人材を捜した。時間はなかったから、かなり焦っていてな……困っていた俺達に手を差し伸べてくれたのは、予想外に、遠方から来た親友だった」

「…どこから？」

「ジャポーネの親友、

朝利雨月だ

…恵みの村雨…

「プリーモとの出会いって聞いてもいいか？」

山本は、緑茶を啜りながら、向かいに座る初代雨の守護者、朝利雨月に話を聞いてみた。

「ん？プリーモとの出会いでござるか？」

「ああ。なんとなく気になるんだ」

「なんてことはないでござる……プリーモがまだ若かりし頃、家の都合で日本に来日した時でござった。」

「ん？でもその時代の日本って……」

『まだ侍歩いてんじゃ…』

「？どうかしたか？」

「い・いや、なんでもねっ！続けてくれ」

「拙者はいつものように家で大好きな笛を吹いていたでござる。」

「そっか！音楽が大好きだもんな！」

「左様。その時、いきなり、金色の髪をした青年が家を訪ねてきたでござる。」

……

「雨月の笛の音は素晴らしかった。来日して、日本を目にして、可憐で素晴らしい国だと、感心していた。日本の笛の音色を初めて聞いたというのもあり、吹いている主の顔が見たくなって家を訪ねてみたんだ」

『プリーモって…意外と行動的…』

……

「しかし、会って早々に焦った…なにせ言葉が分からない」

「イタリア語だもんな…」

「しかし、プリーモは、見る限り…ただ拙者の笛の音が聞きたそうな様子でござった。だから、しばらく拙者は何曲かプリーモに笛の演奏をしたでござる。」

「なんかいいよな～そういうの！言葉の壁超えたって感じで。」

「しかし、その時プリーモは、曲の聞くだけ聞き何も言わず行ってしまったでござる。」

「え・」

……

「雨月の音楽を聞きたくて、俺は…必ずまた会いに行くと心に決めた。そして次は…ぜひ言葉を交わしたいと思い、イタリアで日本語の勉強を始めた」

「へえ～！そのくらい朝利雨月って笛が上手なんだ」

「ああ。うまいぞ。雨月が来たら笛を吹いてもらうといい」

「はい！」

……

「プリーモが再び家に来た時は拙者も驚いたが、きっと、拙者の笛を気に入ってくれたのだと、すぐわかったでござる。プリーモは少し日本語の勉強もしていてくれていた」

「へえ～！」

「名と、拙者の笛を好きだと言ってくれたこと。たどたどしい日本語でプリーモはそう拙者に語った。本当に嬉しかったでござる。拙者もプリーモと会話をしたい！その一心から、イタリア語の勉強をしたでござる」

「む、難しかったんじゃないっすか？！」

「無論かなり骨が折れたでござるよ…プリーモから、イタリア語の５０音順のような表をもらっていて、
まずは読み書きから入ったのを覚えているでござる。」

「あはは！昔の人だよな！」

「おかげで、文までは、なんとか互いの言葉で済むようになったでござる。」

「すげー！！」

『やっぱ、昔の人って頭いいのな〜』

「プリーモの自警団を創る話も、文から知ったことでござる……プリーモは素直に、創る苦悩や悩みを文に綴っていた。」

……

「そして、ある一枚の手紙をきっかけに、雨月との文通は“一端”途切れるんだ。」

「……え？」

「それは、雨月からの手紙だった。」

――拝啓　ジョット殿

そなたの母国の情勢を文で拝見致して、実に身を割かれる想いであった。ジョットとGの故郷を救う試みに、拙者も微力ながら助太刀致したいと思うている所存だ。きっと、ジョットならば、自警団をまとめられると、異国を代表として推薦する。…拙者はいつ・いかなる悩みでも力になる故、そなたは溜め込めず、必ず拙者に近況を報告して欲しい。……必ず。拙者は、全て整えて、待っている。

敬具

朝利雨月

「この手紙で、俺は雨月の心意が分からないでいた。近況を教えて欲しいと頼む雨月に対して、俺は言われた通り雨月に手紙でたびたび近況を伝えてはいたが、雨月からの返事は来なかったからだ」

「え？ど、どうして…」

「俺もその疑問が絶えなかったが、雨月からの連絡が途絶えて半年後に俺は“雨月の答え”を知ることになる。」

『??半年後…』

「雨月が、イタリアに来たのだ」

「え?!」

「自警団が形成を成してきた時だった。確かその時にはすでにランポウもナックルもいたかな…」

『初代雷の守護者と、晴の守護者だ…』

「でも、なんで……?」

……

「プリーモが自警団を創ると文に書いてあったとき、拙者の中では…イタリアまで足を運ぶことにまだ迷いがあった…」

「じゃあ、なんでなんだ?」

「一つは、プリーモのイタリアの情勢に、当時の日本もやや似ていた…からか、プリーモの気持ちが拙者にはよく分かったでござる…拙者も一応…武士の端くれであったが、農民皆の住み心地のつらさは、一目瞭然だったでござった。だが、拙者は…何も出来なかった。いや…何もしなかったと言った方が正しいか…」

『やっぱ武士だったのか…この人…』

「人を斬る覚悟もなく、農民も助けられず、ただ笛を吹くしか出来なかった拙者にとって…プリーモは実に大きな存在であった。町の者のために自ら動く。拙者に出来なかったことをプリーモは命懸けで行おうとしている。」

「それで、手を貸してやりたいってことか……」

『…この人は人が斬れないっていった…けど、この人の剣は確かに誰もが認める太刀だ。きっと…斬れねーんだ。この人。武士だからって…むやみに人をやらない人なんだ…』

「2つ目は、プリーモからの手紙でござった」

「手紙？」

「自警団を立ち上げたはいいが、人材に苦しんでいたとの内容だったが、同時に…」

―朝利雨月、たまに、お前の笛の音が聞きたくなるときがあるのだ。苦しむとき、悩めるとき、傷心した俺の心を癒やしてくれたのは、お前の笛の音だった…お前の音は、迷う俺に、いつも1つの道標を見せてくれるのだ。どうやら俺は…お前の笛の音無しでは何もできない男になってしまったようだな…。雨月、日本の今日の天気はどうだ？イタリアでは昨晩から雨が降っているんだ。だから、雨月のことを考えてしまったのかもな。

…雨月の笛の音は、この雨のようだな…静かで、全てを洗い流し、再生する機会をくれる。自警団の人材は難しい局面だが…この雨が止み、晴れたら、新しい光が俺達を照らしてくれるだろう。

「……。」

「拙者が、その光になりたいと思った。異国の親友が、心を悩めている、苦しんでいる。拙者に出来ることがあの友にあるのなら…。そう思ったら、身も心もイタリアいるプリーモに向いていたでござる。とはいえ、異国へ行く船は莫大な時間と金がかかる…プリーモ

のもとを訪れるのに半年もかかってしまった」

「けど、あんたは、プリーモの“雨”になりたかったんだな」

「…左様。戦いを清算し、全てを洗い流す鎮静の雨でござるよ。…山本殿」

「あはは！だな！わかってるさ、朝利雨月。」

ジョット…そなたからの文を読んでいたとき、こちらの天気も雨であったよ……

我が儘な…

「雨月さんとの出会いは素敵ですね」

「そうだな…異国だから尚更なのかも知れない。」

「そういえば、雨月さんがイタリアに来るまでに半年かかったんですよね？」

「ああ…確かそのくらいだ。」

「その間に、晴の守護者と雷の守護者も自警団に加わったんですか？」

「ナックルとランポウか？そうだ。ナックルはともかくとして、ランポウは預けられたと言うべきか……」

「預けられた？」

―――――――――――

「はぁ…全く、なんでこの俺様がこの鼻たれ小僧を」

「う～～っ！！だぁ～～ランボさんをバカにするなぁっ！」

「はぁ…全くめんどくさいものねぇ～」

「ツナぁ～～！！」

「まだ出たものね缶詰め…」

「ツナ缶詰めじゃないもんね！」

「全くさ～…こんな小僧がこの俺様の雷の守護者の継承者なんてさ～やってらんないものね」

『……なんかもう俺様だけ帰ろうかな～…』

――――――――――――

「預けられた…って…」

「ランポウの家は、地主なんだ」

「金持ち?!」

「そうだ。ランポウは出会った時はそれは我が儘でな…年齢もちょうど反抗期ってやつなのか、ランポウの親も手を焼いているようだった……」

「地主ってことは、自警団とは敵対関係なんじゃ…」

「ああ…。だから最初は俺達もランポウをかなり警戒してかかってたんだ。そうしたら、ある日ランポウの奴…大号泣し出したんだ。俺達の前で」

「泣いた?!なんで?!」

「…Gの威嚇が…非常に怖かったらしい」

「え・それだけで…？」

「貴族が故に…ランポウは厳しいこの世を知らない。ただ人に臆病者なだけなんだよ」

『あ。そういえばリボーンが、初代雷の守護者は世間知らずの臆病者だって……』

「ランポウは…ただ、人恋しかっただけなんだ。だが、人を惹き付けるにはどうしたらいいのか…。教えてもらってきていない。それが分かった」

「地位やお金でなんとかしちゃうってやつですか？」

「ははは…まぁそんなところだ。年下だからなのか…そうわかってからというもののランポウが可愛く見えてな。自警団に入るという形で…面倒を見ることにしたんだ」

『面倒見良さそうだもんなぁ～プリーモ』

「あの…Gは…」

「ああ…それはもちろん大反対だ…」

『やっぱり……』

「自警団には、上級貴族もいた方が小回りがきく可能性がある…必要な人材だと言いくるめてなんとか、な…」

『獄寺くんとランボも…取っ付きいあいばっかやってるもんなぁ』

「まぁGも…見てくれあんな成りだが、面倒見は割と良い方だからすぐ慣れるだろうと思ったのも事実だ」

……

「ねぇ～ねぇ～！どこ行くの？！ランボさん達どこ行くの？！」

「うるさいものね…プリーモのとこに決まってるものね」

「プリン?！ランボさん！プリン大好きだもんね！」

「……。」

『はぁ…めんどくさっ！プリーモの命令じゃなきゃ絶対こんなガキとなんか歩かないものね……

…優しくて…強い。憧れるプリーモ…誰からも呆れられて…ほったらかしのままだった、自分でもわかってた。そんなどうしようもない俺を、プリーモは心からいつも必要としてくれた。そのプリーモだから…俺様は、プリーモの言うことはちゃんと聞いてるものね…。

』

「……はぁ…早く…プリーモのとこ行きたいものね……」

「ツナぁ〜〜！！」

「……。」

……

「じゃ…臆病者なのに戦いの時前線に出させてたのは？」

「ああ…ランポウは臆病者なんだが、目立ちたがり屋だからだ。」

『そんな理由なの？！！』

「雷の守護者って…変わってますよね…」

「あはは。そうだな…デーチモ。守護者みな変わり者ばかりだ」

「…みんな、個性派揃いです。」

「デーチモの守護者は、俺の守護者達によく似ている」

ヂリリリ…

「？！」

「すまない。電話だ。」

「あ、はい！」

「俺だ……ああ。……わかった。ご苦労だったな…くれぐれも、気をつけて帰って来い」

「？」

「デーチモ、ナックルからだ。もうすぐこちらに到着するそうだ」

「晴の守護者の人だ！」

『ということは、お兄さんだ！』

「ああ。良かったな…デーチモ」

「はい！一安心です」

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8639y/

時間〈トキ〉を越え

2011年12月23日01時52分発行